岩瀬文庫コレクション

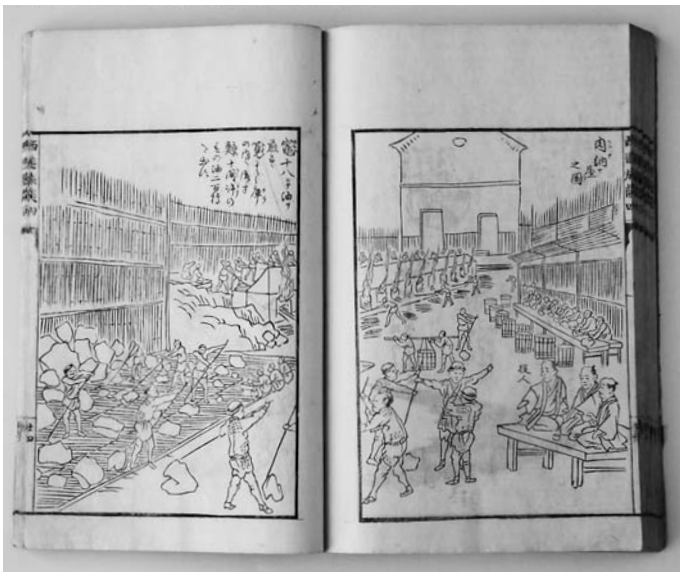
西遊旅譚（99―57）1冊

この資料は、司馬江漢が天明8（1788）年4月23日から翌年の4月13日までの約1年かけて、江戸から長崎・平戸へ旅をしたときの旅日記です。もともとは5巻でまとめられ、寛政6（1794）年に刊行されたもので、岩瀬文庫資料は1冊にとじ合わせたものです。

作者の江漢は、画家でもあり蘭学者でもあります。西洋の腐食銅版画、いわゆるエッチングを最初に日本に紹介したことでも有名です。

この資料では道中各地の様子が描かれていますが、その中でも長崎と平戸生月島の記録に多くのページを費やしています。長崎ではカピタン（オランダ商館長）の屋敷内の絵などが描かれています。また生月島には半月余りも鯨組主宅に滞在して捕鯨を見学し、その様子を多くの挿絵を交えて紹介しています。

そのほかにも有名な場所の風景もさることながら、出会った子どもたちの様子や四日市盆踊りなど祭礼の様子、吉備地方の古墳（そのうちの一つは岡山市に所在する造山古墳と推定）など、旅中に見聞きしたさまざまな情報が描かれています。



▶平戸生月島での捕鯨業のうち、肉納屋（作業場の一つ）の様子。西欧の遠近法を採用した構図で描かれています。

シリーズ 67

西尾の古を探る

赤羽根城と高橋氏

14世紀中ごろ以降、一色の地は西条吉良氏領であって、吉良満義の次男有義を配して治めました。有義は一色殿と呼ばれ、その開基と伝えられる安休寺の境内には父満義と共に墓石が残されています。

永享4（1432）年、中条氏が将軍義教の怒りに触れ、三河国加茂郡高橋荘は没収されて吉良義尚と一色持信に与えられました。このころ高橋荘出身の高橋氏は吉良氏を頼って一色に入り、赤羽根城を居城にしたと思われます。高橋氏は足助氏を名乗った時期もあり『応仁武鑑』にある吉良義真の家老・足助八郎五郎重行は高橋氏の一族と考えられます。

16世紀に入ると、浜松庄の奉行であった寺津城主大河内氏は今川氏と三河・遠江国境一帯で争い、永正10（1513）年、高橋氏は大河内の催促に応じて浜松庄引馬城（浜松市）攻めに出陣しました。13年にも今川氏が甲斐へ援兵を送った留守を狙って再び攻め入り引馬城を手に入れましたが、急ぎ返した今川軍に敗れて大河内氏・巨海氏・高橋氏など立てこもった侍は討ち死に、あるいは生け捕りとなりました。

桶狭間の戦いの後の永禄4（1561）年、吉良荘内での家康と吉良氏との戦いで、酒井雅楽助正親が西条城を攻め、この時に吉良氏に味方する高橋氏の赤羽根城も落城し、6年の三河一向一揆で高橋氏は討ち死にしたと伝えられています。そして『三河国二葉松』に「赤羽根古城　高橋与助」と書かれる、その子与助は慶長5（1600）年6月、家康が佐久島に泊まった折にこれを襲うことを企てたといわれています。